

## 本連載における「翻訳」について⑩

前回(3月号)では、前々回に引き続きタラル・アサドの「翻訳」に関する知見を紹介した。そこでは、イスラームの伝統における聖典の言語や儀礼のあり方を事例に挙げながら、翻訳の対象となる崇拜の行為の意味を理解するには自己の涵養が必要であるが、それはある言説的伝統の中で培われるものであり、それは必然的に他者を必要とし、身体感覚を通して可能になるものであると論じられていることを紹介した。

ここからアサドは、イスラームにおける翻訳不可能性について、それは決して聖典の意味内容に無関心であったり、アラビア語以外の言語の価値を認めないというわけではなく、むしろそれが意味するのは、「テキストの抽象化された知的な意味が、読解的／詠唱的／宗教的な自己とテキストとの関係を変容させてしまうのではないかという懸念」(アサド 2018 = 2021: 112) であると論じる。その前提となるのは、前回にも触れた、言語のメッセージをその媒体から切り離すことはできないという認識であり、その視点から、「媒体がどのように主体に宿るようになり、どのように主体と結びつくかが、メッセージの意味にとって決定的である」(同上) と論じている。

この点を掘り下げるために、アサドは伝統における「儀礼」や「儀礼化」という概念に注目する。そのねらいは、「行為主体が特定の行為によって、いかにして適切な感情と思考を形成するのか、そして、その行為が、いかにして自己の形成における契機と見なされ得るか、という問題に焦点を当てる」ためである(同上: 113)。

その儀礼として取り上げられるのは、「祈祷」(筆者注: 原語は“prayers” = 「祈り」) である。アサドはイスラームにおける祈祷の意味の語られ方を概観した上で、儀礼的な祈祷の場面において発せられるクルアーンの詩句が翻訳不可能なのは、行為者の意志や意図が主観的なもので、それにアクセスするのが不可能であるからではなく、むしろその意図自体が儀礼的な祈祷にとって本質的なものであり、その行為を通して行為者が礼拝に適切な意図を学ぶからである、と論じている(同上: 120-123)。そして、イスラームの伝統における様々な慣習を例に挙げながら、それらも崇拜行為の一部であると前置した上で、「その目的は、繰り返しによって、神に対する適切な態度、すなわち適切な意図、思考、感情を統合した関係を涵養することである」(同上: 122) と述べている。

このようにアサドは、言説的伝統における祈祷の儀礼においては、祈祷をするという意図が先行し、その結果として行為が発生するのではなく、むしろ祈祷という行為をすることによって、またそのプロセスを通して、祈祷に対しての適切な態度が育てられていく、と論じているのである。

そしてアサドは、「翻訳と感覚ある身体」の章の終わりで、「主体がどのように言語を用いるかということだけでなく、言語が主体をどのように用いるかを見るべきなのである」(同上: 139) とこれまでの主要な論点を繰り返した上で、クルアーンの翻訳について以下のように述べている。

クルアーンの構想を感覚ある身体に翻訳すること(特に儀礼的な祈祷で発声すること)は、クルアーンの言語によって可能になっていると同時に、クルアーンの中心的な徳を教えようとする補足的な言説によって可能になっている。そして、ここでのクルアーンの言語の主要な目的は、コミュニケーションすることだけではなく、——親族、友人、教師の助けを借りて——ある過程を形成すること(筆者注: 原文は“to model a process” = 「ある過程を具現化すること」) であり、そこではコミュニケーションはもちろん一つの要素ではあるが、それだけを「抽象化」することはできない。(同上: 138-139、強調点は引用者)

このように、アサドにとってクルアーンの言語を翻訳することは、その抽象化された意味を認知的なレベルで理解することではなく、儀礼的な祈祷の場面などで、その聖典の構想がいかに身体に翻訳されるのかを意味するのである。以前にも少し触れたが、アサドは自身が宗教と同義と捉える「言説的伝統」という用語についても、「意味の定義に焦点を置くのではなく、ある重要な意味において、魂の鍛錬の過程で教えられ規律訓練される行動の慣習と感性に焦点を当てている」(同上: 136) とあらためて述べており、テキストそのものの翻訳を超えた翻訳の捉え方を提起しているのである。

このような「翻訳」の理解の仕方は、多くの読者にとっては直感的な理解からかけ離れたものに聞こえるかもしれない。しかし一方で、これを天理教の実践にあてはめて考えてみるとイメージがしやすくなるかもしれない。たとえば、天理教にとって最も重要とされる「つとめ」を例にとってみると、その地歌である「みかぐらうた」に書かれた言葉の抽象的な意味を抽出しようとするのが一般的な翻訳の捉え方だとすれば、アサドの語る翻訳とは、実際にその地歌を歌いながらおつとめを勤めることで、親神に向き合う信仰者としての主体が身体レベルでどのように形成されるのか、に主眼があると言えるだろう。

さて、これまで10回にわたり、本連載における「翻訳」について様々な角度から論じてきた。その最初の回(第2回、2022年11月号)でも述べたが、そのねらいは「翻訳とは何か」そのものを論じるのではなく、「翻訳」という言葉を分析のツールとして使うことで、これまで異文化伝道研究においてあまり注目を浴びてこなかった地域の取り組みを浮き彫りにすることにある。次回からは、本連載の主題である、フランスを中心とするヨーロッパでの伝道の取り組みについて、これまで考えてきた「翻訳」という視点から眺めていきたい。

## [引用文献]

タラル・アサド(菊田真司訳)『リベラル国家と宗教—世俗主義と翻訳について』人文書院、2021年。

Asad, Talal. *Secular Translations. Nation-State, Modern Self, and Calculative Reason*. New York: Columbia University Press, 2018.